

山と博物館

第24巻 第10号

1979年10月25日

大町山岳博物館



ナラタケ(モトアシ)

撮影 清沢 由之

「キノ」思うまま

キヤビア、フオワグラと共に世界の三大珍味の一つに数えられているトリュッフは地下生の食用きのこで、ヨーロッパを中心とする石灰岩地帯に分布する。木材を腐朽してきのこを形成するシイタケやナメコなどは異なり、生きた樹木の根にきのこを形成するトリュッフの人工栽培は、マツタケと同様に相当難かしいことが予想される。昨年フランスで開催された食用きのこに関する国際会議では、このトリュッフの研究が多数報告され、実際の栽培の試みが参加者に紹介された。

それはナラやブナの幼木の根に菌糸を接種し、菌根が形成された苗木を気候、土壌、および植生的条件が満たされる土地に移植し、トリュッフの形成を待つという方法であった。トリュッフ量産の可能性という問題よりも、私の興味は地下で行われている樹木と菌との生物学的な共生関係にあり、さらに地中に形成されるきのこの収穫をどのように行うかという点にあった。その後者については、訓練された豚や犬の嗅覚に導かれてきのこの存在を確認する方法がとられている。その前者については、わが国でもマツタケに関する研究がいろいろな方面から進められており、根と菌との興味深い関係が明らかになつてつある。

生態系の中で、物質は植物(生産者)、動物(消費者)、およびそれらを分解してもとの無機物にもどす菌類(分解者)の三つの生物群によって循環されており、地球上が動物の遺体や排泄物、他の有機物によって占領されてしまわないのは、きのこなどの菌類や細菌が掃除役として重要な働きを果たしているためである。

自然は、人間の手によって自由に細工できるほどちっぽけな存在ではなく、むしろ自然に守られて我々の生存が可能になっている事実を直視し、謙虚に反省してみるべきだろう。豚を伴って、わが国でトリュッフを捜し歩いてみたいものである。未知の地下生菌の存在を夢みて…。

(日本きのこ研究所 中沢 武)

ヒメネズミの学名

土屋 公 幸

我国の森林に広く分布する小型のノネズミの一種、ヒメネズミには、アポデムス・アルゲンテウスとアカネズミ・ゲイシヤという二つの学名が使われている。国際動物命名規約では、同一の動物種には一つの学名しか使えないことになっているので、どちらか一方が同物異名(シノニム)として無効となるのであるが、それではどちらが有効な学名なのであるか。また、なぜこのような混乱が起きてしまったのであろうか。その原因は、テミンクが記載したムス・アルゲンテウスのタイプ標本を、直接調査したと思われる英国人トーマスが、それはアカネズミの幼獣であるとして、ヒメネズミに対して新たにミクロミス・ゲイシヤという学名を与えてしまったことに始まる。その後、多くの研究者によって論議されたが、結局、テミンクが記載に用いたタイプ標本を再調査しなかつたために、今日に至るまで結論は持ち越されてしまった。

筆者は、一九七八年十二月に、大英自然史博物館において、セスジネズミ属(アポデムス)全種の標本を、トーマスのゲイシヤも含めて調査し、また、ライデン自然史博物館においてアルゲンテウスのタイプ標本三点を調査して、後述するように、アルゲンテウスがヒメネズミであることを確認することができた。

ヒメネズミの研究史

一八四四年。テミンクが「日本動物史」にムス・アルゲンテウス(日本名ヤマネズミ、

ノネズミ)として記載した。

一九〇〇年。パレット・ハミルトンは、ブライヤー氏が日本で採集した2頭をムス・アルゲンテウスと同定した。

一九〇五年。トーマスは神戸産の雄に対してミクロミス・ゲイシヤと命名した。その記載の中で、テミンクのアルゲンテウスは後足長、頭骨の計測値等からゲイシヤより大形のネズミであるとされた。

一九〇五年。トーマスは、アカネズミの記載の中で、アルゲンテウスは、アカネズミの小さな刺毛のない個体に対して命名したものであるとした。

一九一五年。青木文一郎は「日本産ネズミ科」の中でアポデムス・ゲイシヤとしたが、附記として、ムス・アルゲンテウスについて「其大さ、其頭胸の尾に対するの比、其色彩等、本種によく一致せり」として、トーマスがアカネズミの未熟のものとした説に同意せず、アルゲンテウスを疑問の種とした。

一九二五年。岸田久吉は「哺乳動物図解」でアポデムス・ゲイシヤを使ったが、トーマスと青木を引用し、テミンクの記載を訳出した。

一九三四年。黒田長禮は「日本動物誌」複製版に「シイボルトのフワウナ・ヤボニカ中の哺乳類に就て」を解説した中で「ムス・アルゲンテウス? アポデムス・アルゲンテウス、ヤマネズミ。本種は非常に疑はしいもので原著者の他はトーマス、青木、岸田が各々論及」しているが疑問種とした。

一九三七年。花岡利昌はアポデムス・ゲイシヤを用いた。

一九四〇年。黒田長禮は「原色日本哺乳類図説」でアポデムス・ゲイシヤを使い、近似的の疑のあるヤマネズミありとした。

一九四一年。エラーマンは「現生齧歯類の属と科」でアポデムス・ゲイシヤを使い、アルゲンテウスはアカネズミの学名のシノニムとした。

一九四一年。徳田御稔は、アポデムス・ゲイシヤを用い、その中で青木を引用したが、タイプ標本を見ていないのでトーマスに従うとした。

一九四九年。今泉吉典は「分類と生態日本哺乳動物図説」でアポデムス・ゲイシヤを用いたが、附記で、ヤマネズミ(アポデムス・アルゲンテウス)の原記載は明らかにヒメネズミを指しているに違いない、としながらもトーマスに従った。

一九五一年。エラーマンとモリソン・スコットは「旧北区とインドの哺乳類目録」において、ヨーロッパヒメネズミの一亜種としてアポデムス・シルバテイクス・アルゲンテウスとした。トーマスにおけるアルゲンテウスの頭骨に対する計測値は誤りと考えられ、また、アルゲンテウスの記載はゲイシヤと同じであるとして、ゲイシヤをアルゲンテウスのシノニムとして破棄した。

一九五四年。徳田御稔は「

第1表. テミンクのタイプ標本とヒメネズミ, アカネズミとの比較.

計測部位	タイプ標本 (RMNH-No)			ヒメネズミ		アカネズミ	
	a :24211	b :19688	c :24212	KT-1965	♂ad	KT-1868	♂juv
頭 胴 長 (HB)	108.2	75.6	89.6	88.0	101.0	121.5	
尾 長 (T)	37.5+	81.8	34.2+	97.0	94.0	97.5	
後 足 長 (HFsu)	21.2	18.3	22.0	19.5	24.2	24.5	
耳 長 (E)	12.2	11.7	13.5	12.0	16.0	15.5	
鼻 骨 長 (Nas.)	10.1	9.0	9.7	7.1	10.3	12.8	
眼 間 部 幅 (Int.B)	4.8	—	4.9	4.0	4.8	4.9	
歯 隙 長 (Diast.)	8.2	6.3	7.3	5.8	7.0	8.6	
口 蓋 長 (Palat.)	12.4	—	—	9.5	11.6	13.6	
門 歯 孔 長 (Inc.F.)	6.3	4.4	5.7	4.3	5.2	5.9	
上 白 歯 列 長 (Upp.Mol.)	4.2	3.1	4.0	3.4	4.3	4.2	
第 / 上 白 歯 幅 (mlB.)	1.3	1.0	1.3	1.1	1.3	1.4	
下 顎 骨 長 (Mand.)	15.9	11.0	14.6	12.1	15.2	18.3	

後 模 式 標 本 (lectotype): RMNH-no.19688.

野鼠とその防除」の中でアホデムス・ゲイシヤを用いた。

一九五六年。ジョーシズと今泉は、ゲイシヤをアルゲンテウス・シノニムとするエラーマンとモリソンスコットに同意したが、シルバティクスとは頭骨の形態、乳頭数が異なる点で、独立種アホデムス・アルゲンテウスとした。

一九七〇年。太田嘉四夫はアホデムス・アルゲンテウスを用い、シルバティクスに類縁を求めた。

一九七一年。相見満と金子之史は「日本産ネズミ類(野鼠)の分類史的検討」においてアルゲンテウスの記載をもとにヒメネスミおよびアカネズミとの比較を行い、ヒメネスミの特徴が記載されていることを認めたが、テミンクのタイプ標本を再検討してヒメネスミかどうかを同定する必要がある、それができない場合は根拠のある反論を出せない限りトーマスに從わざるを得ず、アホデムス・ゲイシヤとするのが妥当であるとした。

・九七年。小林恒明と早田勇はアホデムス・アルゲンテウスを用い、ゲイシヤはシノニムとした。

・九七八年。コーベットは「旧北区の哺乳類」でアホデムス・アルゲンテウスを用いた。

以上の研究は、すべて形態に基ずく分類に依るものであるが、テミンクの原記載は、多くの研究者が指摘したように、明らかにヒメネスミに対してなされたものと考えられる。トーマスはなぜアルゲンテウスがアカネズミの幼獣であるとしたのであろうか。トーマスの記載に依れば、アルゲンテウスのタイプ標本は、後足長二二三ミリ、頭骨の眼間部中四、九ミリ、門歯孔長五、八ミリあって、ゲイシヤより大きいとある。エラーマンとモリソンスコットは、この計測値を誤り

であるとしたが、テミンクのタイプ標本を直接調査せず、パレット・ハミルトンがアルゲンテウスと同定した標本とトーマスのゲイシヤとを比較しただけである。

ヒメネスミに二つの学名がつけられて混乱している原因が、トーマスのゲイシヤの記載に依って起ったことは確実であるが、その誤りを明確に訂正することができなかったのは、テミンクがアルゲンテウスとしたそのタイプ標本を、トーマス以外に直接再調査するということが誰もしなかったためである。筆者は、ライデン自然史博物館所蔵のアルゲンテウス



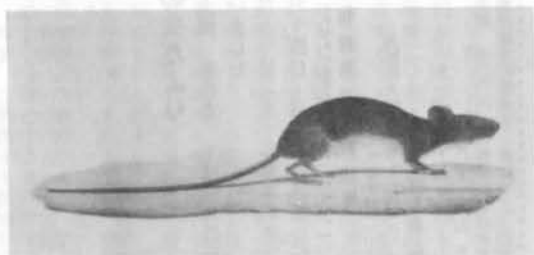
第1 ヒメネスミのタイプ標本(RMNH No.19688)

というラベルのついた標本五点を調査し、タイプ標本三点のうち一点がヒメネスミ、他の二点がアカネズミ(タイプ標本以外の二点もアカネズミ)であり、このうちの一点をトーマスが計測したと推定できる結果を得ることができた。

ヒメネスミのタイプ標本

テミンクが記載に用いたムス・アルゲンテウスの総模式標本は、三点(登録番号二四二一、a標本。一九六八、b標本。二四二二、c標本)であった。外部形態の特徴がテミンクの記載と良く一致するのは当然のことであるが、尾の完全な標本はb標本(写真1)のみで、この標本が原記載の図(日本動物誌、哺乳類十五図の一、写真2)に使われた個体と考えられる。a、c標本は尾の先端が欠失していた。テミンクが記載したアカネズミのタイプ標本と比較すると、アカネズミが大型で、毛色は明るい橙褐色であるのに対してこれら三点の標本は、小型で毛色もヒメネスミに良く似て暗色であった。頭骨は、すべて後半部が欠失していて一部の計測は不能であったが、アカネズミとヒメネスミを識別する特徴は観察できた。

タイプ標本の計測値(本製標本を計測)と、筆者のヒメネスミおよびアカネズミの計測値(新鮮な死体を計測)とを比較(第一表)してみると、a、c標本はアカネズミであり、b標本がヒメネスミであることは明らかである。c標本の計測値は、前述したトーマスの計測値と良く一致することから、彼が調査したのはc標本であったと考えられる。しかし、なぜaおよびb標本を調査しなかったのかは不明である。aおよびc標本の尾の先端が、テミンクが調査した時すでに欠失していたと仮定すると(「日本動物誌」の記載には「全長六ブリス六または七リニユあり、その内尾は三ブリス六リニユを占む」とあって、



第2 日本動物誌第15図の1に描かれたヒメネスミ

尾については、個体しか計測値がない)、頭部より尾の方が長いというアルゲンテウスの特徴は判別できず、色が近似しているからアカネズミの幼獣を、ヒメネスミと混同してしまったものと考えられる。しかし、よく観察すると、ヒメネスミのタイプ標本(b標本)の背面の毛色が金茶色で明るいのに対し、アカネズミの幼獣(a、c標本)の色彩は、それより暗褐色であり、毛色からも判別可能である。いずれにせよ、テミンクが記載したアルゲンテウスはヒメネスミであって、トーマスが記載したゲイシヤより先に発表されているので、アルゲンテウスに先取権がある。ゲイシヤはシノニムとして破棄されることになる。

ヒメネスミの学名は、アホデムス・アルゲンテウス(テミンク、八四四)であり、ライデン自然史博物館所蔵の登録番号、九六八八番(b標本)が唯一のタイプ標本(後模式標本)ということになる。

(北海道立衛生研究所)

オニクの新寄生木について

横内 齊

オニク *Boschniakia rossica* FEDTSCH-ENKO et FLEROV の寄生木については従来ミヤマハシノキ *Alnus crispa PURSH* ssp. *Maximowiczii* HUI-TEN と信ぜられており、牧野富太郎博士、大井・夫博士、牧野三好学博士、奥山春季氏などの著書にも、これを指し他には言及していない。私もこれのみと信じておった、所が意外にも更に一種が見つかったので、本誌上を借りて報告する。

新しく見つかった寄種はミヤマヤシヤブシ *Alnus firma* SIEBOLD et ZUCCARINI var. *hirtella* FRANCHET et SAVATEIR である。これを見出したのは養命酒中央試験場(上伊那郡菅輪町所在)の所員卯之原慶助氏である。

今年氏は六、七の両月二回に涉って同地を訪れ探索したが、今年は何なる理由かオニクは発生せず、止むなく去年の残骸二株を採集して帰った。

見出しの経緯は大体以上の如くであるが、氏は親切にもぜひ私に此所を見せ新しい寄生木を確認させたいというのである。

去る八月十八日私共(妻きよが助手として同伴)は、前夜宿泊の武智鉱泉を氏の車に依って出発、およそ一〇kmぐらいいも上流に作業道を登った、途中本流と黒沢の合流する付近に車を止め、名ばかりの山径を登り、斜度目測二十度ぐらいいの急坂に、名ばかりの小径がついている。登り下り共氏は老令かつ病後の私をいたわって下され、帯皮を握ってその登降をお助け下さった。尾根の中腹まで登り右折して滝に向って下る。間もなく大滝が雄姿を

見せる、目測四、五十mもあらんか、白い飛沫をあげて洶々と奔流するさまは白龍が踊るがようである。



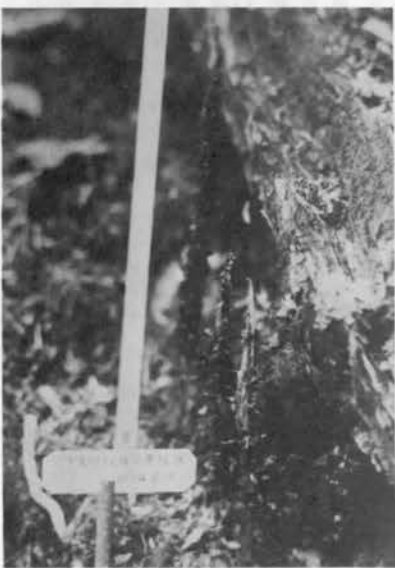
狭流谷を落下する大滝



ミヤマヤシヤブシの茎葉

この山は全山広葉樹林と言ってもよい、その主なるものを挙げる、ミズナラ、ハウチワカエデ、ウシコロシ、コナラ、ウリハダカエデ、ナナカマド、ヤマウルシ、コクザギ、オオカメノキ、キレバケハリギリ、ホツツジ、ミヤマヤシヤブシ、トウゴクミツバツツジ、マルハカエデ、ミヤマハハソ、ハナヒリノキ、コウヤボウキ、コミネカエデ、キハギ、ヤマブドウ、バツコヤナギ、ダンコウバイ、ヤマツツジ、タラノキ、ヒヨウタンボク、クロモジ、ザリゴミ、サラサドウダン、クロイチゴ、ノリウツギ等で、ごく稀に、ゴヨウマツ、モミ、チヨウセンゴヨウ、ツガ等が点点混交している。

現地は花崗岩の急斜面で、ミヤマヤシヤブシの純林とも言えるもので、付近にはホテイ



ミヤマヤシヤブシと寄生したオニク

ラン、ミヤマナズナ、トダイハハコ、タカネピランジ、カモメランなどの珍種も見られ、四季変らぬイワヒバの姿も多い。

この行に於て、オニクが一八〇〇mという低所に発生し、しかもミヤマヤシヤブシという新(私にとつては)寄種によるという、珍しい事実と接した。

本行に終始、ご厚意をお寄せ下さり、恙がなくその目的を果たすことのできたのは、実に卯之原慶助氏の賜物である。厚く御礼を申しあげる。

友の会だより

山博「友の会」では、次の行事を行います。

- ・十月十三日(土) 高瀬ダム見学会
- ・十月十四日(日) S.L.と親しむ会

(東筑摩郡四賀村)

山と博物館 第24巻 第10号

発行所 長野県大町市TEL②〇二一
大町市 大町山岳博物館

印刷所 大町市 俵町 大糸タイムス印刷部

定価 年額 八〇〇円(送料共) (切手不可)
郵便振替口座番号(長野)三三三三三三